下懸（しもかけ）遺跡（本発掘調査B）

調査地点（1/2.5万「西尾」）

所　在　地　安城市小川町
（北緯34度54分25秒 東経137度5分43秒）

調査理由　中小河川改良工事

調査期間　平成 30 年 11 月～平成 31 年 2 月

調査面積　900 ㎡

担　当　者　酒井俊彦

調査の経過　調査は中小河川改良工事に伴い、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて当センターが委託を受けて調査を実施したものである。本遺跡は平成 12、21 年度、25 ～ 28 年度に鹿乗川導水路の東側と鹿乗川と導水路間の調査を行っている。今回を含めた総調査総面積は 9800 ㎡である。今年度は下懸橋の南側、鹿乗川と導水路間の調査を行った。

立地と環境　本遺跡は矢作川下流域、鹿乗川左岸の沖積地に立地する。鹿乗川は碧海台地東辺を南流し、川の西側の遺跡周辺は平坦な沖積地である。右岸の碧海台地上には姫小川古墳などの古墳群が展開し、平成 12 年より本センターが調査を行っている鹿乗川左岸には、北から南にかけて姫下、寄島、下懸、五反田、惣作の 5 遺跡が連続して所在する。中世以前の鹿乗川は矢作川沖積地を蛇行して走り、本遺跡及び姫下、惣作、寄島で東西方向の旧河道が確認されている。遺跡はこの旧鹿乗川の自然堤防上に展開し、標高は 5 ～ 6m を測る。これまでの調査では弥生時代、古墳時代前期、古代および中世の遺構、遺物が検出されている。また、調査区北側には北東から南西方向に流下する弥生時代以前の旧河道が確認され、古墳時代前半の土器と木製品が出土している。

調査の概要　今年度の調査区は平成 25 年度 B 区の北側、平成 26 年度 C 区の南側に隣接する部分である。調査は南北に長い調査範囲を北半を 18A 区､南半を 18B 区として調査区を設定し、上下 2 面の調査を行った。上面は近世～昭和期の耕作土層下の古墳時代包含層である黒褐色土層上面で遺構検出を行った。上面では A 区で北東から南西に走る幅約 2m、深さ 0.3m の中世溝 1 条を検出し、少量の山茶碗と常滑窯産甕が出土した。下面は包含層下位の暗灰色シルト層上面で遺構検出を行った。主な遺構として､古墳時代の竪穴建物､土坑､溝が検出された。竪穴建物は A 区下面で 3 棟検出され、いずれも遺存状況が悪く、床面近くまで削平されている。規模が判明するもので短軸約 2.8m 長軸 3m 以上を測り、他 2 棟は不明である。このうち 2 棟は床面上に炭化物層が確認された。また、A 区で長径 3m 以上の大形土坑を検出したが、大部分が調査区外となるため性格は不明である。出土遺物については、黒褐色土包含層中および撹乱土層から弥生時代後期土器、古墳時代土師器、古代土師器、灰釉陶器などが出土している。

ま　と　め　調査区の北から西側にかけて弥生時代以前の旧河道が存在し、今回の調査部分はこれに隣接する微高地に相当する。調査区北側と南側の調査では竪穴建物は無く、遺構は希薄である。今年度調査区では比較的多くの遺構が検出された。立地環境を踏まえて遺跡内の遺構分布、集落立地などについて検討することが課題である。　（酒井俊彦）

A区上面全景（西より）

A区下面全景（東より）

A区上面中世溝

A区下面遺構

A区下面竪穴建物遺物出土状況

A区下面竪穴建物完掘状況

A区下面遺物出土状況

調査区遠景（南より）